

2015年9月7日(月)

神奈川新聞 教育面掲載

ザ・チャレンジ

ザ・チャレンジ

(大学受験編)

グローバル化の進展と今後の急激な人口減少により、日本は国際的な存在感の低下の危機にあります。これからも国を発展させていくため、教育改革は避けて通れないとして、文部科学省はその大きな柱である「大学入試改革」を着々と準備しています。まずは2020年に現行の大学入試センター試験が廃止され、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」や「高等学校基礎学力テスト(仮称)」が導入される見通しです。

明治維新以来、工業を発展させ大量生産を行うことが日本の産業の中心でした。工業社会では「勤勉・正確・迅速に仕事をこなす人材」が求められ、大学入試も時勢を反映し「暗記・再現・反復」が中心でした。しかし情報社会へ転換していく中で、正確・迅速さを求める仕事はどんどん機械化・自動化されます。オックスフォード大学のM・A・オズボーン准教授は「今後10~20年程度で、約47%の仕事が自動化される可

能性が高い」とも言っています。それ故、文科省は「人工知能には解答できない問題と向き合える人材」が必要と考え、そのような人材を育てるために、従来の大学・高校での学習内容および両者をつなぐものとして大学入試のあり方全てを変革しようとしているのです。

特に大学入試では、私立大学を含めて、これまでの知識偏重型脱却の動きが見られます。まず「思考力・判断力・表現力・英語4技能」を国公立大学の2次試験のような「猛烈な記述問題、を用いて出題。また「主体性・多様性・協調性」を見極めるために志望理由書や面接、小論文、プレゼンテーションなどで審査するという方向です。それらの実現可能性には疑問も呈されていますが、単に「知識があればよい」という時代は終わりました。「知識をどう活用し、より多くの人々に還元するか」、それを考え抜く力が求められているのです。

Q. 大学入試改革、どんなもの？

この入試改革が行われるのは5年後、つまり現在の中学1年生からの予定です。「自分には関係ない」と思う高校生もいるかもしれません。でも、よく考えてみてください。社会人となって何年か過ぎると、その改革の洗礼を受けた後輩と一緒に仕事をするのです。彼らは「Creative Collaborative Art Worker」、つまり「この世に一つしかないものを作り出す、人工知能に負けないための人材」になるべく教育を受けています。彼らと一緒に実りある仕事をしていくため、今、自分たちにできることを考え、積極的にトライすることが必要です。

(CG高等館 東進衛星予備校)

※幼児教育から各段階の進学対応まで、多様な“学び”の情報を紹介。次回は小学校受験編。

A. 「人工知能に負けない人材」目指す

